

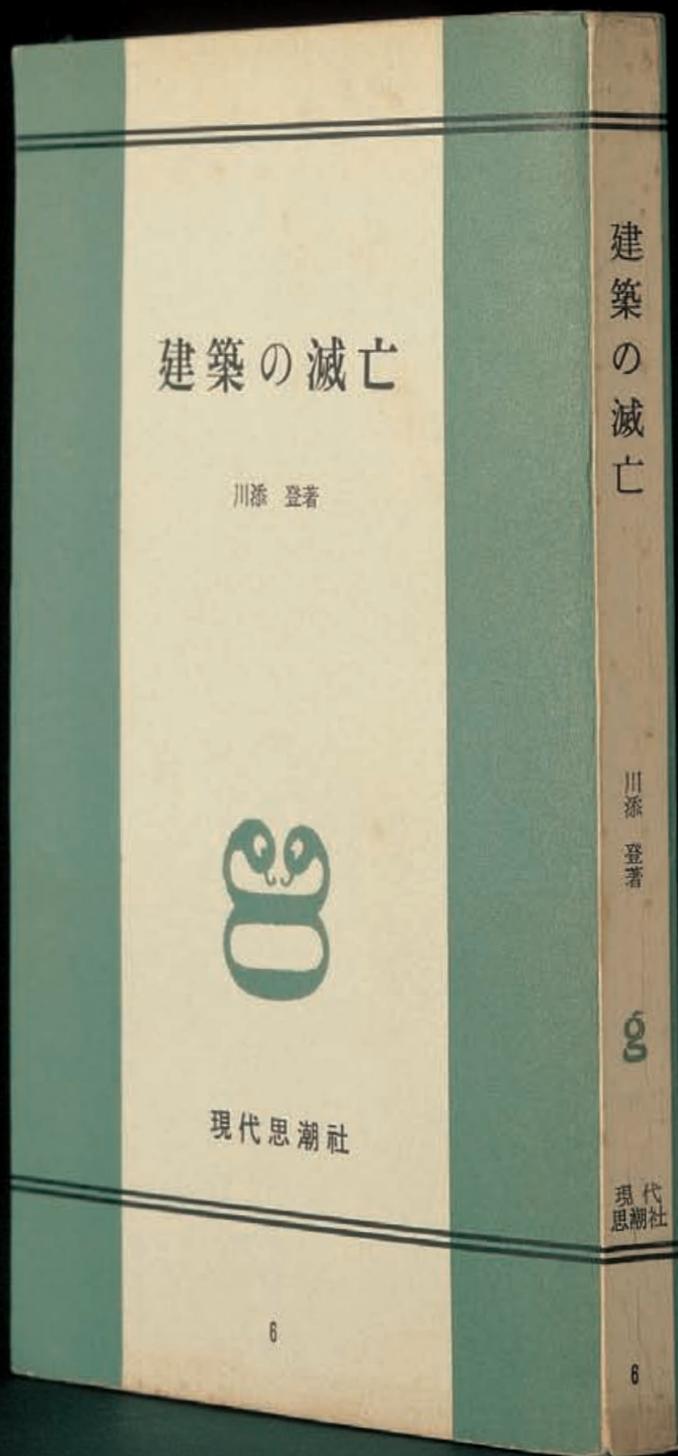
『建築の滅亡』

川添 登

丹下健三が提唱し、浅田孝、川添登らが実行したという「世界デザイン会議」が成功裏に終わったのは1960年5月。メタボリストたちは、来日した世界の建築家、デザイナーを「メタボリズム」をもって迎え撃ち、自らの存在を知らしめた。

その5ヵ月後、氏は書きためた小論をまとめた、著書『建築の滅亡』を建築界に突きつけた。「われわれは文明の底に横たわる本質を次第に見失いつつあるようだ。われわれには新しい哲学の建設が必要」と。川添登、34歳である。

伝統論争を仕掛け、建築評論の礎をつくるなど、『新建築』の黄金時代を築いた氏が、フリーの建築評論家として、この著書に託したものは…。約半世紀を経た今、川添登が静かに語り始めた。



再読『建築の滅亡』

壮大な文明論として未来を語ること

半径5m以内を考えると事足りるような小さな私の物語にあふれた21世紀初頭の日本から見ると、川添登の『建築の滅亡』を再読して改めて驚かされるのは、議論のスケールがあまりにも大きいことだろう。第一、まだ20世紀の半ばだというのに、なんとも禍々しいタイトルである。磯崎新の『建築の解体』[*1]やハンス・ゼードルマイヤーの『中心の喪失』[*2]など、ジャンルの終わりを煽るような芸術論はときどき登場するが、ここで使われている言葉は“滅亡”だ。川添の代表的な著作は、メタボリズム[*3]の理論的なバックボーンを形成したマニフェストというべき書だが、建築の枠を超え、古代から未来まで、あるいは宗教から映画までを包括した壮大な文明論にもなっている。

本書を理解するためには、まずその特殊な時代背景を振り返る必要があるだろう。現代とはまるで違う状況だった。日本が太平洋戦争に敗れ、焼け野原になった後、1950年代には朝鮮特需もあって、復興に拍車をかける建設ブームが起きていた。そして1964年には念願の東京オリンピックが開催されることから、首都高の建設などを含み、東京の大改造に突き進む。高度経済成長期を迎え、激しいスクラップ・アンド・ビルドが起き、人口が急増する都市問題が騒がれる。何もかもが不可逆的に変化していく時代だった。また、この本が刊行された1960年は、世界デザイン会議[*4]が開催され、メタボリズムが登場している。今なお、日本発の最も有名な現代建築の理論といえよう。それは明治以降、海外の動向を追いかけ、模倣してきた日本の建築が、初めて世界の建築と同じ地平に立ち、共振を開始した歴史的な瞬間でもあった。力強くなるのもなづける。川添がメタボリズムの運動を牽引したように、彼と同年生まれの宮内嘉久は前川國男のモダニズムをサポートしたが、編集者が建築家と共同戦線を張る世代だった。

各章ごとに、内容を見ていこう。

最初の章「シンボルの破壊」では、テレビなどの新しいメディアが登場し、建築と文字、すなわち実体の世界と観念の世界を代表していた社会的なシンボルがともに危機に陥ったという。そして歴史上最後の階級である民衆＝小鳥のように自由な労働者の支配する現代社会において、かつての大聖堂が持っていたような永遠性を特徴とする“建築”は必要なかと問う。川添は、印刷術が大聖堂を殺すというヴィクトル・ユゴーの有名な言葉を引用しているが、これはコンピュータとインターネットの展開が目撃された1990年代にもよく参照されたアフォリズムである。21世紀のドバイや中国でもシンボリックなアイコン建築が増殖しているように、必ずしもこの予言は当たっていないが、建築とメディアの関係を考察する議論としては、極めて早いものといえるだろう。

第二章「建築の発生」では、われわれがどこへ行くかより、まずどこから来たかを考えるべきとして、伊勢神宮やメキシコのピラミッドを論じる。そして定期的につくり替える“新陳代謝”の状態こそ、永遠性の中に長く生き続けるという。川添は、前著『民と神の住まい』[*5]でも、「不死鳥のはばたき」として伊勢神宮を論じていたが、本書では更に社会背景を分析し、人類はドラマチックな英雄の世界から新しいノン・ドラマチックの個人時代へと移行すると述べている。

第三章「芸術の変貌」では、美術の危機とモダニズム建築批判から諸芸術の統合が起きていることや、大スクリーンの映画がもたらす新しいイメージの地平に触れる。そして第四章「大衆の夢」では、



『建築の滅亡』川添登著（現代思潮社 1960）



『民と神の住まい 大いなる古代日本』川添登著（光文社 1960）

[*1] 『建築の解体』磯崎新著（美術出版社 1975）
[*2] 『中心の喪失 危機に立つ近代芸術』ハンス・ゼードルマイヤー著、石川公一・阿部公正訳（美術出版社 1965）
[*3] メタボリズム（INAX REPORT No.171, p.23参照）
[*4] 世界デザイン会議（INAX REPORT No.171, p.23参照）
[*5] 『民と神の住まい 大いなる古代日本』川添登著（光文社 1960）▶▶▶ 図版右

[*6] 『地球幼年期の終わり』アーサー・C・クラーク著、沼沢治治訳（東京創元新社 1969）
[*7] CIAM（近代建築国際会議）W.グロピウスやル・コルビュジエなど近代建築の開拓者たちの集まりで、建築史家G.ギーディオンが書記長を務めた。1928年にスイスのラ・サラ城で第1回会議を開催、建築や都市を社会的・経済的に捉える姿勢を打ち出した。1956年の第10回会議で若い世代「チーム10」からの批判を受けて1959年に解散（大川）
[*8] ブラジリア 1960年の遷都により、ブラジルの新首都となった都市。1956年の公開競技設計で1等となったルシオ・コスタ案は、ジェット機型の平面パターンを持ち、胴体部分は政治的中枢地域、翼部分は住居地域。議場や大統領官邸などの主要建築は、公開競技の際に国家審査員であったオスカール・ニーマイヤーが設計を担当した（大川）
[*9] 小松左京 ▶▶▶ p.31
[*10] 梅棹忠夫（1920～）民族学者・生態学者。京大文学部動物学科

卒業。多くの海外調査体験と生態学、および比較文明学の視点に裏付けられた『文明の生態史観』（中公文庫 1974）というユニークな世界史の理論を発表、西洋をモデルとしたマルクスの歴史理論に依拠する人々に強烈なインパクトを与えた。視野の広さと思考の柔軟さには定評があり、知的情報の整理学である『知的生産の技術』（岩波書店 1969）はベストセラーとなった。国立民族学博物館の初代館長として民族学の発展と普及に尽くし、理系出身の立場からさまざまな学術行政にも提言を行っている（大川）
[*11] 日本未来学会 川添登、小松左京、梅棹忠夫、菊竹清訓らが集い、1968年7月、未来予見のための学問的可能性を追求することを目的として設立。以後毎年、時代性のあるテーマの下、研究会や国際会議、公開シンポジウムなどを開き、未来を論ずる中で、社会への提言を行ってきた。1998年11月には30周年記念シンポジウム「人類の未来—Future of Mankind」を開催し話題を集めた。2007年7月より「新日本未来学会」としてスタート（大川）
[*12] 『東京の原風景 都市と田園との交流』川添登著（日本放送出版協会 1979）
[*13] 生活学 第二次世界大戦下の生活改善への関心の中から提唱された学問。建築を含む多くの領域を“人間生活”を中心に学際的に融合する学問として展開された。今和次郎は「習慣」、「慣習」、「流行」、「合理」、「模倣」という5つの生活概念を生活学の理論の基盤として捉えていた。1972年には今を初代会長として『日本生活学』が設立された（大川）

電気製品と自動車が普及し、団地族が国民の有り得べき生活として宣伝されたという。だが、川添は交通、移動、ホテルなどの増加に注目し、大衆的な消費社会のムードに代わる新しい世界像の建設が必要だと述べる。またヨーロッパの都市には“建築”の概念に通じる廃墟があることを述べているのは興味深い。磯崎新がしばしば取り上げる廃墟は、まさにこうしたものだろう。一方、黒川紀章や菊竹清訓の議論やドロウングには、ヨーロッパ的な廃墟のイメージは登場しない。とすれば、メタボリズムと彼の違いは、ここにも存在していたと指摘できるのではないか。

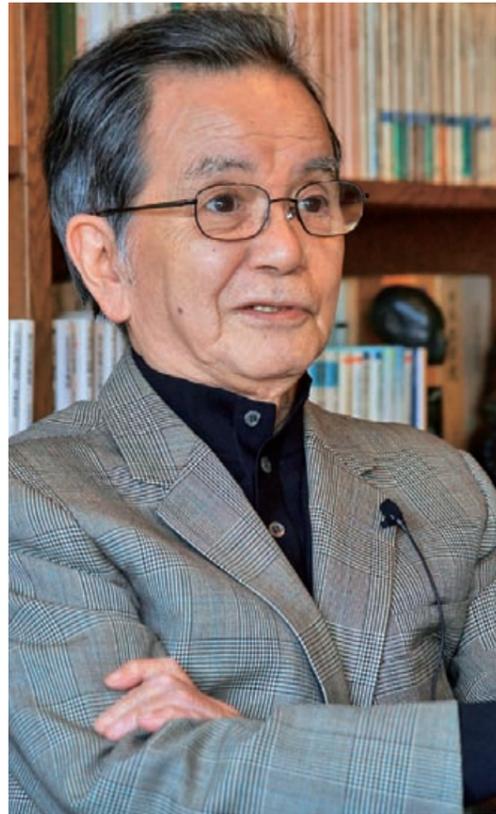
第五章「人間と文明」では、現代の科学は人類を幸福にできるかと問い、未来のビジョンが必要だと説く。新しいメディアは、ばらばらの個を維持しつつ、集合的な無意識をもたらし、本能の世界に向かう。川添自身もSF小説を参照しているが、例えば、アーサー・クラークの『地球幼年期の終わり』[*6]を想起させるような壮大なビジョンだ。そしてCIAM[*7]を解体に追い込んだピーター・スミッソンやルイス・カーンらによる一人の統合的な全体像を拒否する試みに対し、新しい都市デザインの秩序の可能性を認める。

最終章の「未来の都市」は、以上の議論を踏まえ、メタボリズムの建築運動を援護射撃したものだ。川添は、現代都市はどんどん変わり、発展するのだから、ブラジリア[*8]のような固定したマスタープランでは直ちに廃墟が生まれると批判している。「東京の新陳代謝の激しさは無類であろう」。そして現状追従のリアリズムか、実現不可能なユートピアの択一ではなく、「生成発展する現代都市のダイナミックな動きに即応しつつ、混乱の中から秩序を見出し、その秩序から新しいエネルギーを放出するものでなければならない」という。彼は、はっきりと“メタボリズム”の語を用い、菊竹清訓、黒川紀章、大高正人、横文彦らのプロジェクトを積極的に紹介する。ラストは、更に予言的だ。コミュニケーションと交通が極度に発達すると、集住の必要が消え、人類は自然の中で個々の生活を楽しむ。その時、巨大都市は在りし日の時代を物語る廃墟になるという。

1968年には小松左京[*9]や梅棹忠夫[*10]らの提唱により、日本未来学会[*11]が設立されたが、これは未来を語る時代の雰囲気や建築の分野において先取りした著作である。もし現在、30代の著者が、こうした大風呂敷の建築論を発表したら、袋だたきにあうだろう。もはや若さを失った日本の社会が許容しないからである。今回、『建築の滅亡』を再読して、意外にジークフリート・ギーディオンとの共通性に気付いた。もちろん、彼が支援したモダニズムを批判し、それ以降の動向を加速させようとしたのが、川添である。だが、古代から現代までを射程に入れ、時には美術や道具の歴史も論じ、文明論として大きな物語を紡ぐ視座や、特定の建築運動を擁護する態度は似ていよう。ただし、ともに装飾、洋館、マイノリティなど、近い過去や他者を無視した勝利史観であることは気になる。長谷川堯、鈴木博之、布野修司など、後の世代の建築批評が注目したのも、そこだった。後に川添自身『東京の原風景』[*12]を執筆したり、生活学[*13]を提唱するなど、地に足がついた言論活動を展開している。もっとも、現在、大上段に立ってビジョンを展開する論者があまりいないことも少し寂しい。✿

いがらし・たろう——建築史家・建築批評家／1967年生まれ。1990年、東京大学工学部建築学科卒業。1992年、同大学院修士課程修了。博士（工学）。現在、東北大学准教授。第11回ベネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示コミッショナーを務める。
主な著書：『終わりの建築／始まりの建築』（INAX出版 2001）、『近代の神々と建築』（廣済堂出版 2002）、『戦争と建築』（晶文社 2003）、『美しい都市・醜い都市』（中央公論新社 2006）、『現代建築に関する16章』（講談社 2006）、『新編 新宗教と巨大建築』（筑摩書房 2007）、『結婚式教会』の誕生（春秋社 2007）など。

霞ヶ浦湖上都市（1961）黒川紀章（写真：大橋富夫）



川添登氏

特集2

著書の解題—9
[対談]時代を画した書籍—9
『建築の滅亡』

ゲスト	川添 登	NOBORU KAWAZOE	(建築評論家)
聞き手	内藤 廣	HIROSHI NAITO	(建築家)

19歳、
宮崎県都城市で入隊

内藤 今日早稲田流に「川添さん」と言わせていただきます。著書目録をばらばら見て、この人にお話を伺うのは大変だと思いました(笑)。著作数が多すぎてとても全部は読めない。ですから、川添さんのしっぽの先ぐらいつかまえていない感じがあります。今日の本題の『建築の滅亡』、その直前に出版された『民と神の住まい』、それと最難関でしたが最近の力作である『伊勢神宮』[*1]も読ませていただいて、頭の中がばんばんになりました(笑)。ひとつずつ伺っていこうと思います。

まず最初に、お生まれは東京ですね。巢鴨でしたか？

川添 はい、北多摩郡巢鴨町、駒込の染井です。ソメイヨシノの発祥の地として知られる染井。

内藤 子ども時代は、だいたい駒込辺りをうろつろつしたというか(笑)。

川添 そうです。当時の染井は明治の面影が残っていましたが、大正のハイカラな感じもある静かな佇まいでしたが、そのうち中山道沿いの西巢鴨に引っ越したんです。こちらは当時のスプロール地域で、良く言えば郊外、悪く言えば場末で、山手と下町がごっちゃになったような土地柄でした。

内藤 それ以外の所で印象的な所はどこですか。

川添 短い期間だけど軍隊に行っていましたから、阿蘇とか、霧島の東の裾野に当たっている吉松盆

地。

内藤 学徒動員ですか？

川添 学徒動員じゃなく、徴兵です。

内藤 お幾つの時ですか？

川添 19歳。私は普通より2年遅れているんです。中学時代に病気で1年休学し、それから中卒後、1年浪人して専門部工科に入ったんですが、入った途端に引っ張られちゃった。

内藤 専門部の学生がですか？

川添 そう。本来なら私たちは兵役にはかからないはずだったんですが、終戦間際になって徴兵の義務が1年下げられましてね、私たちの年代だけが19歳で徴兵検査を受けたんです。私は第二乙種合格で召集されました。その1ヵ月ほどの間に早稲田大学専門部工科の入学許可の通知も来ただけで、1日も通ってない。

内藤 即入隊ですか？

川添 両親が宮崎出身で、本籍地が宮崎だったから、そこで徴兵検査を受けて都城市で入隊したんです。

内藤 慌ただしい話ですね。

川添 そうです。東京でも受けられたんですが、戦時中で何もかもが閉塞状態でしたし、いくら父母の郷里だといっても、なかなか九州までは行けない。だから旅行気分で行ってみたいと思って行ったわけです(笑)。

内藤 なんという無邪気な(笑)。入隊後はどんな感じだったんですか。普通はつらい話ばかり聞きますけど。

「文明論をもつて 滅亡」を大胆に見



『伊勢神宮 森と平和の神殿』

[*1] 『伊勢神宮 森と平和の神殿』川添登著 (筑摩書房 2007) ▶▶ 図版上

[*2] 巢鴨プリズン 巢鴨拘留所(現在の東京拘留所の前身)の通称



内藤廣氏

川添 入隊するはずの部隊は、既に出発していたため補充隊に回されたんです。東京から入隊した唯一の初年兵でしたから、将校・下士官には可愛がられたんですが、内務班(兵営)では上等兵に徹底的にいじめられました。私が東京弁を使うと「軍人精神が入っとらん！」って殴られるわけです(笑)。とにかく向こうの唯一の楽しみは、少年兵を殴ることでしたからね。異常な経験をしました。

内藤 よく聞く話です。

川添 ただ、教練があったのは最初の約1ヵ月。われわれ補充隊は、米軍上陸に備えて九州最後の防衛線陣地を阿蘇の外輪山につくるという任務に就きました。しかし、すぐに混成中隊を編成して、宮崎県京町へ派遣されて、民家に分宿しました。南九州の武器、弾薬、被服、食料の軍需物資を吉松盆地に集積するわけですが、たまたま私は食料を管理する部隊だったんです。お米や大豆などが列車で送られてくるのを駅で受け取って、とりあえず駅構内の倉庫に運ぶ仕事なんです。そのお米を少々失敬して農家に分けたりして、たらふく食べているうちに太っちゃって…。で、日曜日は休みだから分宿した民家の農作業を手伝ったりしてね(笑)。

内藤 面白いですね。終戦はどこで迎えたんですか？

川添 終戦の日は、たまたまお盆に当たっていて、よく働いたというので、野菜購入という名目でおばあさんのいる宮崎県の田野村へ墓参を許されたんです。そこに向かう列車の中で、都城から乗り込んで

隣に座った人から「日本負けたよ」って言われた。内藤 その時はどういう感じでした？おおよそ、もうダメだと思っていたんですか？

川添 ダメだなんていう予想は特にしていなかった。自分たちにどういう関係があるのか、よく分からなかったですね。

内藤 それで、その後どうされたんですか？

川添 2泊3日の盆休みを過ごしてから部隊に戻りました。その時、管理していた食料すべてを地元住民に分配して、都城の原隊に復帰した後に、復員事務を手伝い、11月に東京に帰ってきたんです。そしたら、みんなが僕のことダルマだとか、入道かいうんですよ。まるまると太って、正座できなかったくらいでしたから(笑)。

内藤 東京に帰って、東京の風景をご覧になってどうでした？

川添 東京はもう全くの焼け野原で、延々と焼け跡が続いていました。宮内嘉久が「廃墟」と書いていますが、廃墟というのは、遺跡が残ってないとね。それと、人間の生活は全くないどころか、東京は完全な焼け野原で、焼けビルにも人が住んでいたから遺跡ではなかった。印象に残っているのは、明るくなる年になると、もう草ぼうぼうでね、その草がみんな外来種だったことです。進駐軍の食料に混ぜてやって来たんでしょうね。ということは、焼け跡にも人間の生活があった、ということなんです。

内藤 この大塚も巢鴨の辺りも焼け跡で何にもなくて真っ平らだったんですか？

川添 そう、ずーっと…。それで“巢鴨プリズン”[*2]の所だけが不夜城みたいに明るくて、高い建物が建っていて、その辺にだけ電気がパツパツとついてた(笑)。そこ以外は全部焼け跡でした。

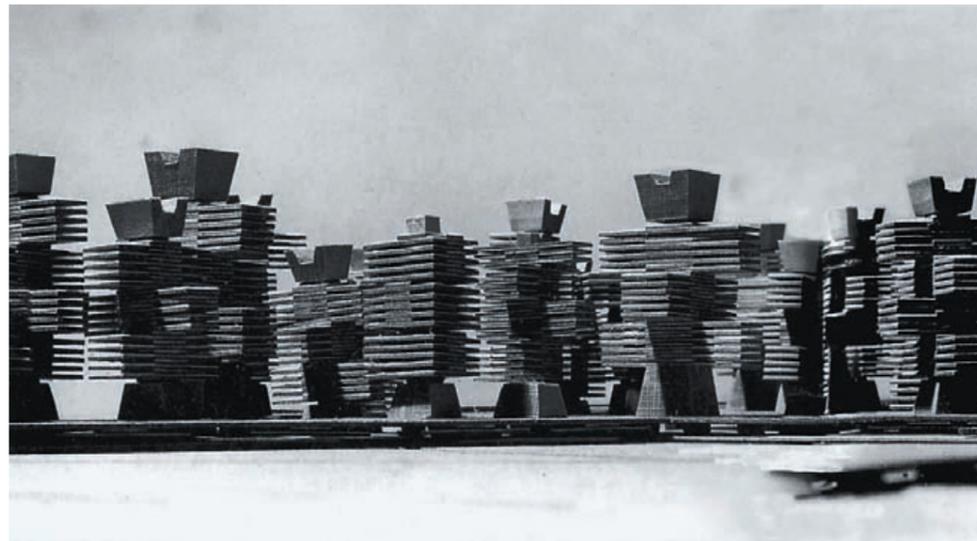
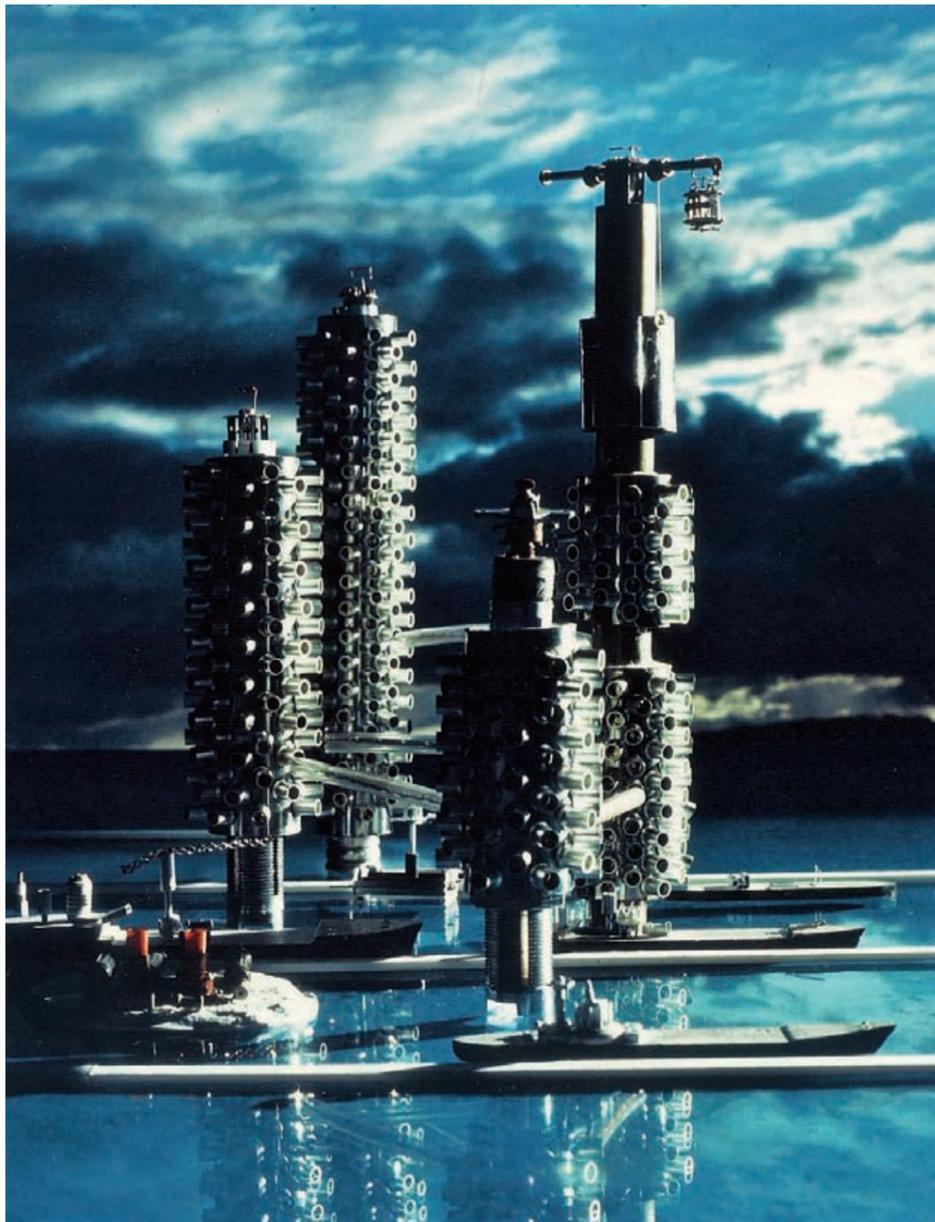
内藤 もちろん悲惨な光景もたくさん目にされたとは思いますが、川添さんの戦中戦後の体験談は、僕らの世代が想像するのとは違って、何か明るい感じですね。

川添 性格なのかな。それとも忘れちゃったのかな(笑)。あんまり暗く考えないですね。上野駅の地下道を始め、銀座とか池袋などの片隅には、浮浪児がいっぱいいました。僕は“子ども会”をして浮浪児とも付き合いましたが、つらいはずなのに、みんな明るい子どもたちでしたよ。人によっていろんな捉え方があるということじゃないかな。

松尾先生と今先生に心酔した
早稲田時代

内藤 しばらくして大学に戻られたんですか？もともと建築学科を選んだのは、家業もあってのことですか？確か建設業でしたね。

川添 家業もあったね。それより文科系は軍隊に引っ張られるけど、理工系だと徴兵が延びるはずだっ



たんですよ。

内藤 見込み違いだったんですね。建築家になりたいとは思わなかったんですか？

川添 なってほしいとは思っていませんね。

内藤 大学では途中で脇道にそれて、児童文学とか児童のことをやられますね。建築家になって児童施設をやろうと思ったんですか？卒業論文も児童施設ですもんね？

川添 卒業論文は「幼児施設の研究」で、歴史・教育・社会の3部作でした。

内藤 設計は？

川添 卒業設計は、戸山ハイツの住民たちを、ワシントン・ハイツの敷地に移して、コミュニティ施設の整った住宅団地をつくるというもので、弟・智利とその友人のレーモンド事務所にいた三沢浩君に手

伝ってもらってやったんですよ。アイデアは面白いんだけど、相当いい加減だったと思います。

内藤 指導教官はどなたですか？

川添 指導教官という制度がなかった。

内藤 先生は今（和次郎）先生[*3]ですか？

川添 あの頃は、今さんは設計の方はもう見ていなかったですね。設計の指導をしていたのは、今井兼次、明石信道、武基雄、この3人の先生だったと思います。

内藤 指導はどういう感じだったんですか？

川添 今井先生は丁寧に教えて下さいましたよ。それぞれに面白かったけど、僕は授業にはほとんど行ってないですよ（笑）。

内藤 やっぱり大学に行かなかったんですか？

川添 大学に入っても授業にはあまり出なかった。

[*3] 今和次郎（1888～1973）
異色、異才の建築学者にして風俗研究者。東京美術学校図案科卒業。岡田信一郎の推薦で、創設されたばかりの早稲田大学建築学科の助手となり、佐藤一に師事。以後、晩年まで後進の指導に当たった。民家研究のバイオニアであり、独自の都市建築研究によって“考現学”を提唱。人々の活動をさまざまな側面から観察し、数量化し、記録する方法を提示した。その研究範囲は服飾、風俗、生活、家政にまで及ぶ（大川）

[*4] 松尾隆（1907～56）
ロシア文学者・文芸評論家。早稲田大学露文科教授。筆名・木寺黎二。マルクス主義者で、青年共産同盟早大支部の会長を務めた。ドストエフスキーの文献学的研究者として知られ、著書に『ドストエフスキー文庫考』（三笠書房1936）、訳書に『シエストフ選集』（改造社1934～35）などがある

特集2

【対談】時代を画した書籍—9

今さんの助手をやったり、マルクス主義の学生運動をやったりしていました。

内藤 学生運動にのめり込んでいたようですね。入り口は松尾隆[*4]という英語の先生でしたね。いきなり黒板にマルを書いたという…。

川添 そうそう、ロシア文学のね、最初の英語の授業の時に、先生が黒板に大きな円を描いて「これを英語全体の集合と考える」と話し出したんです。私は度肝を抜かれて、さすがに大学はすごい、偉い先生がいるものだったと思ったわけです。それが松尾先生だった。先生の授業は、いつの間にか脱線に脱線を重ねて、集合論から天文学へと広がっていきんですね。私はすっかり参っちゃった。先生の講演会は知り得る限り聞き、更には先生のお宅にも伺って、さまざまなお話を聞かせていただいたんです。

メタポリストたちの提案

左—海洋都市（1968）菊竹清訓 「塔状都市」と並ぶの未来都市提案。1958年の「海上都市」は、オニバス、巻貝、クラゲ、海綿といった生物などからヒントを得た5タイプの都市が提案された。続く「うなばら」と題された1960年の計画は、人口50万人の生産都市で、一定の規模を超えると細胞のように分裂し増殖するという。その後も外洋に対応した「海洋都市」を始め幾度となくスタディが繰り返された後、沖縄国際海洋博覧会の「アクアポリス」（1975）として実現された（写真：村井修）
中上—新宿ターミナル再開発計画（1960）大高正人・横文彦
世界デザイン会議でのプロモーション用のプロジェクト。都市化時代における建築の在り方として「群造形」というコンセプトに基づき、大高と横が共同で提案。鉄道をまたいで壮大な人工地盤が設けられ、その上に建築が展開されるという提案は、大高の人工地盤への関心を示す。主に大高が西口のオフィスタウン、横が東口のアミューズメントスクエアを担当している
中下—ゴジラ体（1968）横文彦 人と建築との関係性をモデル化した都市集合体。カプセル空間を高度に発達した知識産業社会の基本的空間のひとつとした上で、内部空間と外部空間が相互に入り組んだモデルが提案された。ここに示された“界限空間”は、後に、日本的都市空間としての“すきま”や“奥”へと展開されることになる

右—農村都市計画（1960）黒川紀章 世界デザイン会議、同年のニューヨーク近代美術館の展覧会でも話題を集めた。水田の上部に格子状のペDESTリアン・デッキを架け、さまざまなネットワークを組むことを可能とし、成長と変化に対応できる都市的なシステムとして提案されている。農村と都市を対立的に捉えない黒川の世界観が示されていた（写真：大橋富夫）

内藤 不思議な先生ですね。松尾先生は余程、魅力的な方だったんでしょうね。

川添 とても魅力的でした。亡くなるちょっと前にね、「俺の弟子が2,000名いるが、先生の弟子にしてくださいと、あいさつに来たのは、川添ひとりだ」と言っていたらしい。奥さんが言っていました。

内藤 松尾先生に心酔して、心から弟子になりたいと思ったわけですね。

川添 思いました。今さんにも心酔して、弟子にしてくださいと、あいさつしているんです。

内藤 川添さんが引き寄せられるのは、どうも左側のようにですね（笑）。

川添 左側ですよ、もちろん。あの時代に左にならないのはどうかしている（笑）。まじめに考えようとしているヤツはみんな左だった。

内藤 それはやっぱり戦争が終わって180度、今度はこっちの方に変わるんだというような気分があったわけですか。新しい社会をつくれると信じたんですか。

川添 だってさ、新しく出来てくるんだから。どっちにしたって新しいわけでしょう。元と同じのが出てきちゃ困ると、誰だって思うよ。

内藤 そうですね。元どおりになっちゃ困ると…。その時の思考のひとつの在り方として、まあマルクス主義っていうのがあるんだと。基本的にはマルクス主義を勉強したのは、大学に入ってからです。それとも、戦前から…。

川添 戦前はない。やっぱり結局のところ、松尾先生ですよ。

クビで始まってクビで終わった 新建築社時代

内藤 大学の頃から新建築社にアルバイトに行かれていた？

川添 早稲田の明石さんの紹介で、新建築社編集部でアルバイトしていました。1年か半年くらい。

内藤 入社のエピソードは、『思い出の記』^{〔*5〕}で面白く読ませていただきました（笑）。「新建築社に入社早々、私は『くび』になった」…というくだりです。卒業論文や卒業設計が忙しかったために長期に休んで、卒論を仕上げたから入社してみると、どうも変だ。で、編集長の三輪（正弘）さんから、「社長は川添を雇うつもりはない。あいつはクビだ、と言われた」という話だったようですね。

川添 入社したら様子がおかしいんです。社長に「こんには」と言ったけど返事も無い。「もう来ないと思っていたから、新しく雇う別の人を決めました…」と、三輪さんから帰りがけに打ち明けられたんです。びっくりして「僕はまだ聞いていない。社長のところへ行って直接聞いてくる」と言って、当時、新建築社の2階に住んでいた吉岡（保五郎）

社長を訪ね、いささか出任せ気味だったんですが、「休んでいる間、『新建築』の編集についていろいろ考えてみた。分からないところ、判断のつきかねるところがいろいろあるから教えてほしい」という話を始めたんです。さすが吉岡社長は数十年間、雑誌で鍛え上げた人物ですから、理路整然と答えるんですね。私も必死でしたから、かなり雄弁にしゃべった。だんだん調子づいて、とうとう将来の抱負にまで話が及んで、帰ったのは12時過ぎなんです。「失礼します」と帰る私に、社長は「明日からしっかりやってくれたまえ」と言ったんです。こうして私のクビはつながったというわけです。

内藤 吉岡さんはジャーナリストとして勤の良い方だったんでしょうね。

川添 勤は良いですね。それと、筋の分かる人なんです。気骨があった。

内藤 そういう意味で川添さんと相性が良かった。川添 そう。だから僕は『新建築』で勝手なことができたんです。

内藤 吉岡さんはもはや伝説上の人物ですね。ただ、川添さんは「当時の建築ジャーナリズムが男子の一生の仕事に値するとは、とうてい思えなかった」と書いていらっしゃる。

川添 そうそう。だから男子の一生の仕事に値するものにするためには“建築ジャーナリズムの確立だ”と思ったわけですよ。それで、読者とともに考える雑誌づくりをやろうと思った。具体的には投稿欄QQQQ^{〔*6〕}につながっていくんです。

内藤 国立国会図書館コンペ^{〔*7〕}規定を巡る建築著作権運動は、吉阪隆正がこのQQQQ欄へ書いた投書がもとになっていますね。

川添 そうです。それから、建築批評と建築評論の確立もやったわけです。

内藤 若い建築家の作品に、先生格の建築家が批評する方法をとっていますね。つまり、どこからも文句のつけられないやり方で、建築批評をスタートさせたわけですね。そして“伝統論争”^{〔*8〕}を仕掛けたり、建築論、作家論などを展開し、活発な編集活動を展開する。吉岡さんの志を継いだ吉田（義男）社長は「いわゆる建築ジャーナリストと呼ばれる方々が続々と登場し、『新建築』は建築ジャーナリズムを確立するための主導権をもった雑誌として注目をあび、世論を沸かせました」^{〔*9〕}と当時を振り返っていたら、編集長としての川添さんは、どちらかという仕掛けるタイプですが、川添さん以前はそういう感じはなかったんですか？

川添 僕の前は三輪正弘さん。三輪さんの前は清家清さん。その前は中村登一さんで、れっきとした共産党員でしたから、どちらかと言えばNAU^{〔*10〕}の機関誌のような感じがした時期もありましたね。

内藤 『新建築』がですか？

川添 だって、見てご覧なさい。ある時期、ほとん



『メタボリズム1960—都市への提案』



メタボリズムシンボルマーク
(デザイン：栗津潔)



『思い出の記』

〔*5〕『思い出の記』川添登著、真島俊一・寺出浩司・佐藤健二編（ドメス出版 1996）

▶▶▶ 図版左

〔*6〕新建築の投稿欄QQQQ
三輪正弘の後を継いで1953年から編集長となった川添が、スタイルブックの域を出なかった建築雑誌に建築ジャーナリズム確立の第一歩として試みた、読者とともに考える雑誌づくりのための企画。当時は掲載されると『新建築』が数ヶ月間にわたり無料となることから、早川和男、茶谷正洋、林昌二、植田一豊といった常連の投稿者が現れた。山口文象や浜口ミホなども投書、若い建築家たちの小住宅作品を先輩格の建築家が批評する機会となった（大川）
〔*7〕国立国会図書館コンペ（1954）（『INAX REPORT』No.173、p.19参照）
〔*8〕伝統論争（『INAX REPORT』No.167、p.22〔*11〕参照）
〔*9〕『新建築 臨時増刊』1974.10
〔*10〕NAU（The New Architects' Union of Japan；新日本建築家集団）（『INAX REPORT』No.172、p.29参照）

〔*11〕新建築問題（『INAX REPORT』No.167、p.22参照）
〔*12〕浅田孝（1921～90）都市計画家・環境建築家。東大の丹下研究室で「広島平和記念館」（1955）や「香川県庁舎」（1958）などの設計にかかわる。建築の領域を超えた多彩な才能の持ち主で、文明的な視点から都市や環境を論ずる論客でもあった。世界デザイン会議の日本側の総責任者である丹下健三の傍らにあって事務局長を務め、メタボリズム・グループを生み出すきっかけをつくった。1961年に環境開発センターを設立。南極観測隊昭和基地の設計者でもある（大川）
〔*13〕塔状都市「国際建築」1959.1、海上都市「同」1959.2

どNAUの人が出てくる。

内藤 それはちょっと意外ですね。そういうふうに見たことはなかった。でも、『新建築』という雑誌としての伝統が、戦前からずっとありますよね。

川添 確かにありましたよ。あるけれども、何ていうかな…。

内藤 やっぱり戦争が終わって、そういう方向にグッといったわけですか？

川添 つまり、戦後すぐというと、建物自体はないわけですよ、都市計画特集みたいなものばかりなわけですね。

内藤 ああ、なるほど。そうすると、社会思想みたいなところに当然行き着くわけですか。

川添 いっちゃう、いっちゃう。それで吉岡さんは自分で編集をするわけじゃないですから、そういう事情でNAUの連中が手伝うようになったのだと思います。

内藤 入社の際にクビを言い渡されたはずの新建築社には、結局、約4年半いらっちゃったわけですね。そして、もはや歴史的にも有名な“新建築問題”^{〔*11〕}で今度は本当にクビになって退社されるわけですよ。

川添 そうです。男子の仕事に値しないと入社した『新建築』の編集は、私の青春時代のすべてをなげうって悔いのないものでしたね。編集部には宮島罔夫、平良敬一、宮内嘉久の諸君を次々に迎えて、最も充実した時期だったと思います。

内藤 すごいメンバーですね。

川添 最後にいわゆる新建築問題で、また改めてクビになるんです。吉田さんと編集部の意見がぶつかった時、実は体を壊して病院にいたんですが、何とかしたいと思ひまして、調整に乗り出したんだけど、時すでに遅し、吉岡さんの気持は動かなかった。それで編集長として責任を取ったわけです。

準備に奔走した 世界デザイン会議

内藤 1957年に退社されて、そして『民と神の住まい』と『建築の滅亡』という2つの本が出版される1960年を迎えるわけですが、川添さんにとって1960年というのはどういう年だったんでしょう。

川添 やっぱり、東京で“世界デザイン会議”があった年だということですね。

内藤 川添さんは、数年前から会議の準備のために奔走されたんですよ。

川添 2年前からです。丹下（健三）さんが会議の準備のために、事務局長に浅田孝さん^{〔*12〕}を指名したんです。ところが、丹下さんはハーバード大学に行っちゃった。僕は浅田さんに呼び出されて幾つかの指令を受けたわけです。若い世代の運動として下から盛り上げるように…と。既に日本インダスト

リアル・デザイナー協会が不参加を表明していたから、工業デザイナーの団体を組織して、会議内容委員会をつくれと言われてました。後で気が付いたのですが、丹下さんが僕に準備を託すようにと、浅田さんに指令していったのです。浅田さんは、ほとんど口出ししませんでしたね。

内藤 『新建築』の編集長時代に、いろいろと論争を巻き起こした経験をお持ちですから、それなりの心得はあったわけでしょう？

川添 建築界ならまだ分かりますが、他の分野は見当もつかないわけですよ。そこで丹下さんが、当時大学院生だった黒川紀章をメンバーのひとりとして派遣したんです。

内藤 つまり実行委員会のコアは、川添さんと黒川さんということですか？

川添 指名されたのは2人だけです。それで僕は黒川さんを連れて、一緒に運動を推進してくれる人材を探し回ったわけですよ。そうして巡り会ったのが、工業デザイナーの栄久庵憲司と、グラフィック・デザイナーの栗津潔なんです。そして、私が幹事長、黒川、栄久庵、栗津が幹事になり、建築界の若手代表として大高正人を委員に迎えて、会議内容委員会が発足することになったわけです。榎文彦、菊竹清訓は、会議に欠かすことのできない出席者として、早くから暗黙の了解として決まっていた。

内藤 運営の費用は誰が出したんですか？

川添 金は財界からですよ。内藤 財界から集めたんですか。

川添 それができるのは坂倉準三なんです。だから、坂倉さんが実行委員長。

内藤 そういうことですか。

川添 やがてそれぞれの分野で活発な議論のもとに組織化が進んでいった。

内藤 それでメタボリズムが出てくるわけですね。

川添 そうそう、そして次に考えたのは本会議に打って出ることなんです。せつかく世界から第一級の建築家、デザイナーが集まってくるのに、お説拝聴というだけではつまらない。迎え撃ってやろう、というわけです。

内藤 気概を示そうとしたわけですね。

川添 以前、菊竹さんが『国際建築』に発表した「塔状都市」、「海上都市」^{〔*13〕}のような未来への提案を共同で出そう…、大高さんと榎さんは、独自に「郡造形」をまとめていたので、それも入れよう…、ということになったんですが、それをひとつの主張とするためにはどうするか。全く日本的な発想で、しかも国際的にも通用する普遍的な理念、方法がなければならぬ。それを明確にするためにはグループの名前も必要だ。それにはどのような語がふさわしいか…と、菊竹、黒川、私の3人は国際文化会館のロビーで毎晩のように話し合ったんです。

内藤 それが、ある時、菊竹さんが和英辞典で見つ



上—アプローチ
右—常設展示室前から吹抜けホールを見る
(写真2点とも：吉村行雄)

熊本県立美術館

設計：前川國男建築設計事務所
所在地：熊本県熊本市二の丸2
規模：地下1階、地上3階
構造：RC造
竣工：1977年
(2005年撮影)



けてきたという有名な話ですね。

川添 そう。“メタボリズム”ね。人間も建築も都市も、自然と対立するのではなく、自然の一部だ。そして普遍的とは根源的、原理的であり、都市も建築も工業デザインも、人間のつくるものには生命の原理が貫き通っている。そして生命の原理を突き詰めると新陳代謝になる、という話はまとまっていたんです。で、新陳代謝を意味する良い言葉はないか、を議論していたわけですが、菊竹さんが辞書から“メタボリズム”という単語を見つけ出してきたんです。語尾はイズムになっていて、主張らしい感じもあるでしょう。

内藤 そうして『メタボリズム1960—都市への提案』[*14]という小冊子が完成するわけですね。

川添 その冊子は、編集は川添登、装丁・栗津潔、レイアウト・川添康子、発行は美術出版社です。宣言文は、凸版印刷板橋工場の出張校正室で私が書き、和英対訳でしたから、直ちに槇さんが英文に翻訳す

る…といった調子で、徹夜で頑張って、何とか開会式に間に合わせたという状況でしたね。

で、会場では売りまくりました。そうしたら、世界から集まった参加者の間では、ちょっとした旋風が起きたんです。会議ではメタボリストたちが、自分の心の中で醸成してきた思いを、それぞれの提案としてこの会議にぶつけて、世界デザイン会議は大

成功するわけです。

内藤 会議には、ルイス・カーンやピーター・スミッソンなど、すごい人たちが顔を揃えたわけですが、その時の反響はどんなものだったんでしょう。全く予想外の新しい概念が出てきた、といった感じで受け取られたんでしょうか。

川添 たぶんそうですね。それまでそういうこ

とを主張した建築論や都市論はなかったですから、それなりのインパクトはあったと思います。彼らにしてみても、それまでの思考に限界を感じていて、自分なりに考え初めてはいたけれど、それをズバツと言われた、といったところじゃないでしょうか。先を越された、と心の中で思っていたに違いない。

内藤 確か、アメリカ帰りの有名な女性編集者であ

特集2

【対談】時代を画した書籍—9

[*14]『メタボリズム1960—都市への提案』川添登編（美術出版社 1960）▶▶ 図版p.23
菊竹清訓「海洋都市」、川添登「物質と人間」、大高正人・横文彦「郡造形へ」、黒川紀章「空間都市」などを所収

った瀬底恒さんが、事務局長の補佐役を務められたんですよね。

川添 そうです。しかし、事実上、事務局をやったのは瀬底さんでしたね。浅田さんはやらないですよ（笑）。

内藤 瀬底さんは大活躍だったんですね。

川添 大活躍どころじゃないよ。閉会式に事務局長報告をやらなくちゃいけないわけですが、浅田さんはそういうのが苦手で、閉会式に出てこないわけね。とうとう坂倉さんが瀬底さんに「君、やりたまえ」と言ったんです。それで瀬底さんはノートなしで事務局長報告をやったんですよ。

内藤 英語でですか？

川添 英語でね。堂々として格好良かったですよ。

内藤 瀬底さんは数ヵ月前にお亡くなりになりましたが、戦後ジャーナリズムのスピリットを貫いたような人でした。

川添 瀬底さんはすごい人ですよ。生き字引です。だからあの人がいなくなって、あの頃のことを思い出すのに随分困ることがあります。

内藤 僕は晩年、親しくさせていただいて、とても可愛がっていただいたんです。瀬底さんは建築の善し悪しをはっきりと言う方でした。どんなに偉い建築家の作品でも、ダメなものはダメ、と言ってはばからない正直な方でした。

川添 あの人ね、目は確かだよ。

内藤 企業誌を扱うコスモピーアールを立ち上げられて、編集者としてもすごい人でしたね。

丹下さんの影響で伊勢神宮、そして『民と神の住まい』

川添 『建築の滅亡』を出した時は、丹下さんはだいぶご機嫌斜めでしたよ。

内藤 斜めだったんですか？

川添 そりゃそうですよ。「建築が滅亡するなんて言うのと、建築評論も一緒に滅亡するよ」と言ってね（笑）。

内藤 『民と神の住まい』の時はどうでした？これは川添さんの2つ目の著作ですね。

川添 一番最初は1958年の『現代建築を創るもの』[*15]で、次に1960年の2月に『民と神の住まい』、5月に世界デザイン会議、10月に『建築の滅亡』という順ですね。

内藤 初期の『民と神の住まい』、これはほとんど伊勢神宮について書かれた本ですね。それからおよそ半世紀たって、最近も『伊勢神宮』を上梓されている。意外なことに、川添さんのお仕事を改めて俯瞰してみると、ずっと通奏低音のように“伊勢”があったんですね。建築ジャーナリズムとは別の次元で“伊勢”にこだわり続けてこられた。僕にとって川添さんのイメージは、全然そうじゃなかったん

です。

川添 あっちいたり、こっちいたり？

内藤 新建築、新建築問題、世界デザイン会議、メタポリズム、大阪万博、それから生活学会。調べさせていただく前は、そういうようなアイテムしか浮かんできませんでした。“伊勢”というキーワードが僕の中に出てこなかったんです。ところが、伊勢にはこだわりのスパンがすごく長くて、『伊勢神宮』を読ませていただくと、あまりの密度と執念に疲れ果てました（笑）。ライフワークだなという気がしたんです。川添さんが、伊勢そのものに最初に接したのはお幾つくらいの時ですか？

川添 戦後ですよ。やっぱり丹下さんの影響でしょうね。丹下さんは私たち夫婦の仲人で、新婚旅行に伊勢に行くといいよと薦められたのです。行ってみて感動し、『民と神の住まい』を書きました。そして、丹下さんが渡辺義雄さんと朝日新聞社から『伊勢』[*16]を出す時に、私も加えてくれたのです。

内藤 戦前は行かなかったんですか？

川添 戦前にも行きました。行ったけど、それは旧制中学の修学旅行ですからね。

内藤 その時はどうとも思わなくて、それが浮かび上がってきたのは戦後。

川添 戦後です。

内藤 それからもうずっとですよ。

川添 ずっと。私の著作には『黒潮の流れの中で』、『建築と伝統』、『「木の文明」の成立』、『列島文明』[*17]という、近代建築とは別のもう一つの系譜があるのです。今、ますますですね。

内藤 ますますですか。「わが国の文化のマスターキーだ」と書いてらっしゃいますね。その辺りのことをちょっとお伺いします。

川添 最近、学問自体が解体していると思うんです。例えば文化人類学は、人類の家族はあまりに多様だということで、定義するのを諦めてしまいましたね。その理由は、ほ乳類や鳥類でも、つがいで仔を育てる動物は、すべて巣をつくりますから、人類家族で住居を持たない家族はありません。ですから、住宅抜きでは家族を定義づけられるはずはない。要するにモノ抜きの人間関係だけの学問なのです。

内藤 それは社会全体の無意識ということですか。

川添 学問は本来、そうした無意識を相対化する役割を担っているはずなのに、それを助長する方になってしまった。かつての大和朝廷は、現在では倭王権とされていますが、この王権にも定義がなく、フランスのブルボン王朝も、トンガの王様も、どちらも“王権”なんです。だから、自分たちで定義できなくして、学問をおかしくしちゃった。全体的にそうです。そうした文化全般の無意識を解き明かすマスターキーとして“伊勢”があるわけです。

内藤 明治辺りにつくられた言葉は、迎るとほとんどそういうことになっていませんか。



上―伊勢神宮（写真：神宮司庁）
下―『伊勢 日本建築の原形』



『現代建築を創るもの』

[*15] 『現代建築を創るもの』川添登著（彰国社 1958）▶▶図版上

[*16] 『伊勢 日本建築の原形』丹下健三・川添登・渡辺義雄著（朝日新聞社 1962）▶▶図版上

[*17] 『黒潮の流れの中で』（筑摩書房 1969）、『建築と伝統』（彰国社 1971）、「木の文明」の成立―上 精神と物質をつなぐもの、下 日本人の生活世界から』（日本放送出版協会 1990）『列島文明―海と森の生活誌』（平凡社 1994）

[*18] ポスト構造主義
構造主義とは、言語に内在する構造を解き明かした言語学者F.ソシュールに影響を受け、さまざまな研究対象の構造を研究する方法。ポスト構造主義は、文化人類学者のレヴィ・ストロースやジャック・ラカンなど、構造主義を担った世代の後に登場した哲学者たちの思想のことを指し、構造主義が切り開いた知の領域を批判的に継承している点に特徴がある。ジャック・デリダやジル・ドゥルーズに代表され、古代から近代に至るヨーロッパ的形而上学思考における“自明の前提”を掘り返し、そこから新たな問題を見い出そうとする。また、M.フォーコーのように理性と政治、知と権力の内在的共犯関係を鋭く自覚する点にも特長がある（大川）

[*19] 島根県立古代出雲歴史博物館（2006）横総合計画事務所



出雲大社（1982年撮影）

川添 明治もそうだけど、その状況が顕在化したのは戦後です。1970年代から80年。あの頃に出てきたポスト構造主義[*18]というのは、既存の社会構造、つまり無意識を相対化するという意味でポストモダンなわけですよ。これに対して構造主義は、戦前戦後の1940年代で、ソシュールの言語学とか、ピアジェの発達心理学、ゲシュタルト心理学など、あの日頃、“構造主義”のことを盛んに言っていたけど、もともと社会体制の中にある無意識を批判するために出てきたんですよ。

内藤 僕もかぶれました。翻訳が悪くて内容はよく分からなかったですけど。

川添 それはそれでいいんです。ところが、その揚げ句が、根本的に社会そのものがグズグズになってしまったから、もう何にもなくなっちゃったわけです。これは社会学とか、どの学問にも共通していえる。そうすると、イロハのイの字から、つまり誰でも分かることでやらなきゃダメだと思ったんです。“伊勢”にこだわるのはそういう気持があるからなんです。今、『伊勢神宮』で書き残したところを書こうと思ってるんだけどね。

内藤 続編ですか？

川添 そう、続編です。歴史的な掘り起こしを中心にしたので、『民と神の住まい』で論じたような建築的なところはあまり書いていない。『皇大神宮儀式帳』というのがあるんです。

内藤 はい、記録ですよ。

川添 奈良時代か平安時代に、その儀式帳に正殿とか、御酒殿の建築寸法が出ているんです。ところが全部、床上寸法で、床下がない。だもんだから、建築史の頭の固い連中は、昔の伊勢神宮は土間式だった、なんていう説を出しているんですよ。で、どうして床下寸法が書いてないかということ、傾斜地でしょ。だから決めた寸法が出せない。

内藤 決められない。平地に建てたわけじゃないから。

川添 そう。傾斜地です。ですから平安時代の寝殿造りだってみんなそうですよね。掘立柱。

内藤 『民と神の住まい』では、今の伊勢神宮の石垣というのは、近代のものなんじゃないかって書かれていますよね。

川添 そう。あれは昭和4年。

内藤 要するに城塞みたいに見えるのは、どうも新しい話ではなかったかと…。

川添 まず、そこからいくわけですよ。他方、掘立柱でさかのぼっていくと、最も高い掘立柱は「出雲大社」でしょ。

内藤 何mでしたか？

川添 46m。その模型が今、槇さんが設計した「島根の博物館」[*19]に展示されています。出雲大社は平成25年に平成の大遷宮がある予定です。今年、20年は仮殿遷座祭があるということで、博物

館に納める前に新宿の京王プラザホテルのロビーに展示されていたんです。1／10の模型ですが、1／10でも、ものすごくでかいですよ。

内藤 そうですか、それはうっかりしました。見ていません。島根の博物館もまだ見ていませんが、行った時に模型も見えます。

川添 それで気が付いたんだけど、床下の柱の径が2m半なんですけど、そのままの断面で上までいっている、しかも全部ヒノキ。長さになると、埋められた部分を含めて50m。大体ヒノキで50mものなんてありませんよ。長さも太さもそのままなんて…。まあスギだろうと思いますが、同じ太さで上までいくとすれば、スギでもないと思います。

内藤 それ、おかしいですね。

川添 おかしい。細くなっていかなきゃ。

内藤 でも3本を束ねた柱でしょ？

川添 あれは、後です。大きな木がなくなったから、3本柱にしたんです。

内藤 もともと3本を束ねた柱だったということはないんですか？

川添 ないと思う。僕はやっぱりスギの木立を見て、あの一番高いところに神様はいるとしてつくったと思うんです。

内藤 じゃあ、1本柱ですーっと…。

川添 上へいくと細くなって、神様のいるところはヒューマンスケールになるんですよ。

内藤 上の方は案外、華奢なものだったかもしれませんね。

川添 巨大な木を強引に同じ太さになるように削り出したわけじゃない。恐らく自然の木のイメージを残したものだと思ったと思う。だからヒューマンスケールなんですよ。言われれば、そういう間違いは誰でも分かるでしょう。そこらがダメなんです（笑）。学者は聞く耳を持たない。間違いに気付いたはずなのに、自説にこだわってみんな変なことやっている。僕も模型を見るまでは気が付かなかったから、あまり自慢はできませんが、こういうメチャクチャなことがいっぱいあるんですよ。

内藤 要するに、思考の基礎となる礎石がないということですね。頼りにならない、ということのようですね。

川添 目がいい加減なんです。いい加減にしか見てない。頭だけで考えている。だからそこからやり直すよりしょうがない。

内藤 話が少し飛びますが天照大御神と豊受大御神の話も書いてらっしゃいますよね。で、僕は去年か、出雲の古伝新嘗祭、いわゆる“くらやみ祭”に行ってきたんです。行かれたことありますか？

川添 僕は行ったことないです。

内藤 あその拝殿の中で、全部明かりを消して、2時間くらい祭事をやるんです。五穀豊穡の新嘗祭なんですけど、その時に神職が歌う神歌が暗闇に響く



上—正面全景
右—外陣から入り口を見る

善照寺本堂

設計：白井晟一建築研究所
所在地：東京都台東区西浅草1-4-15
規模：地上1階
構造：RC造
竣工：1958年
(1992年撮影)

中で、宮司が舞うんです。幻覚を生じるギリギリぐらゐの祭事でした。現代人の空間感覚で失われたようなものが、暗闇の中でモヤモヤと立ち現れるのが、非常に面白かったです。僕らが知っているのとは違う時間と空間の流れ、僕らの心の底に沈んでるような不思議なものを感じることができました。

川添 僕も、伊勢の遷宮祭の時に、天照大御神が天岩戸へ入って、世の中が真っ暗になって…、とあるでしょ。何かおどろおどろしい感じ、そういうものじゃないかと思っていた。それで僕ね、1972年の遷宮祭の遷御の時に、正殿の一番奥に入って、正殿の前の薪を焚く係にしてもらったんです、哲学者の上山春平や、作曲家の黛敏郎などと一緒に。その時にね、僕の中のイメージでは、真っ暗闇の中で薪を焚くと、薪の火が正殿に反射して闇の中に浮かび上がる…、そういうイメージだったんですよ。

内藤 いかにも太古の神が現れるようなイメージがありますね。

川添 そしたら全然違った。それは、今でこそ太陽暦でやっていますが、昔は太陰暦なんです。太陽暦でやっていますが、この前の時は十八夜くらいでした

から、中空にまだ月がありました。本来は、外宮は、十五夜の満月の日の夜中から明け方なんです。内宮は、その明るく日の十六夜で、月が煌々と照っていたんです。神域を囲んで、スギ木立が黒々と囲む中の神域の上空だけが、空が長方形に抜けている。そして、その下に敷き詰められた白玉石が月の光を反射して、白々と明るいですよ。

内藤 綺麗でしたか？

川添 綺麗というよりは、別世界という印象でした。それもくっきりした形で、ぼやけた形じゃないんです。だけど、白玉石が敷かれたというのは、恐らく中世になってからです。それから、スギ木立に囲まれたのもその頃でしょうね。古代からとは言えない。だんだん、そういうふうになっていったんですよ。いきなり今みたいになったわけじゃない。

内藤 川添さんがご覧になった次の遷宮の時ですが、地元の町衆に混じって「お白石持行事」で石を置きにあの建物の下まで行きました。真っ昼間でしたけど、あっけらかんとした感じでした（笑）。もうちょっと「おおっ!!」という感じかなと想像していたんです。遠くで見ていると、結構、何かありそ



うな感じがしたんですが、近くに行くと、割と普通な感じがして不思議でした。もちろんピカピカで新しいということもあるんでしょうけど。

川添 ところがね、そのあっけらかんさが、また何とも重要なんですよ。私は1992年には外宮の遷御に参列させてもらったんです。ここに外宮があって、参道がずっと続いているでしょう。遷御の時には、参道の反対側に池があるんですが、そこに全面板スギが張られまして、その祭事に参列するための招待者が1,000名くらい入るんです。わざわざ、前日の夜からホテルをとって集まるわけです。例えば司馬遼太郎さんとか、各界を代表するような文化人も来ていました。次の遷宮は2012年でしょう。やっぱり、すごいと思いますよ。

内藤 やはりみなさん関心をお持ちなんですね。

川添 その場に立ち会ってみなければ分からないんですよ。ちょっと不思議だなと思っていたんですが、やっぱり思い込んでいた雰囲気とは違うんです。“遷御”というのは、大御神が大宮司、小宮司、禰宜（ぬぎ）に奉戴されて本殿から出御されて新殿へ入御される祭事で、大御神がお遷りになる御列は幕で囲ってあって見えないんですが、大御神が通る時、見守っている参列者が思わず手を叩くんですよ。その拍手が行列の流れと一緒にさーっと移動するんです。これが何ともいえない感動だったんです。柳田國男は、「昔、祭りは、暗闇の中で関係者だけでやったものだが、奈良時代になって見物人が出てきて、初めて祭礼になった。みんなのものになった」と言っているんです。やっぱり見物人がいないと成り立たないと思いますね。

内藤 それは、近世になってからですかね。

川添 今の方式は、近世どころか近代になってからですよ。恐らく平安初期には見物人がいたけど、現在とは違うかたちじゃないですかね。もう少し…。

内藤 不思議なものだったのかもしれない。秘められたもの。

川添 いや、もうちょっと雑かな。

内藤 それはどういう感じですか。

川添 雑というか、大衆的。近代以前は、“伊勢講”とか“伊勢参り”の気分が残っていて、もっと普通の人に近しいものだったんじゃないかと思う。

内藤 鳥羽市にある「海の博物館」〔*20〕の設計をした時に感じたことがあります。

川添 海の博物館、あれは良い建物だね。

内藤 ありがとうございます。あの博物館は漁師たちの生活文化に関する資料収集をやっているんですが、意外と普通の人たちとの交流が、当たり前のようにあったようですね。今のように閉ざされた神秘のような扱いではなくて、もっと開かれたイメージです。現場の帰りは伊勢に泊まるので、次の日に伊勢神宮にも随分行っています。年配の人に話を聞くと、今みたいに大層に閉じたのは最近のことだそう

ですよ。

川添 伊勢には、今のわれわれの目からは見えないようになっている、不思議というか、興味深い話がたくさんあるんだよ。

建築家を刺激したか、『建築の滅亡』

内藤 メタボリズムが話題をさらった世界デザイン会議を成功裏に終えられて、そのメタボリズムのプロバガンダともいえるような『建築の滅亡』がその後すぐに出版されます。その間、不在だった丹下さんは、メタボリズムという動きが出てきて微妙な感じだったでしょうね。丹下さんとの交流に関して、“川添さんと丹下さんの蜜月時代”〔*21〕と何かに書いてありましたけど、特別、気が合ったんですか？

川添 丹下さんの元の奥さんに言わせると「あなたくらい、丹下が可愛がった人はいないわ」というくらい、丹下さんに可愛がられたんです。**内藤** 何で…、と言うのもおかしいですけど…。

川添 丹下さんという人は、建築以外、関心のない人なんです。例えば、丹下夫人から聞いたんですが、丹下さんに望まれて結婚したのに「既に恋人がいた」と言うわけですよ。何ていう恋人かということ、“タテコさん”という恋人。つまり建築なんです。

内藤 タテコさんって、建築の“建”の字（笑）？

川添 そう、建築以外は何にも興味がないんだって。丹下さんは自分の方から話題を提供するタイプの人じゃないんですよね。それなのに、「川添さんとは2時間も3時間も2人で楽しそうに話してる。何を話していたの？」って夫人が聞くんですよ。「建子さんの話に決まってるじゃないですか」と言うと、「そういえばそうね、私ってダメな奥さんだったんだなあ」と言うんです。話が分かれば、自分も一緒に話題に入れるわけですからね。

内藤 建子さんといってもいろいろですよ。川添さんは丹下さんと、どんな建子さんの話をしていたのですか（笑）？ちょっと教えていただけますか？

川添 それを今、一生懸命思い出して何かに書こうと思っているんだ。僕も忘れちゃっているからね。**内藤** あの時代にどのような会話がなされたのか、その辺りはとても興味がありますね。

ところで『建築の滅亡』は、それ以前に書きためられたものを、メタボリズム的な思考を中心にまとめて出版なされたものですよ。建築家たちにとっては刺激的なタイトルですが、反論はこなかったんですか？例えば、丹下さんはどうだったんでしょう、“建子さんの滅亡”みたいな話ですから…。

川添 丹下さんからはさんざん嫌みを言われたね。「そんなこと書くと建築評論も滅亡するよ、大本がなくなるんだから」って。そりゃそうでしょうね。

内藤 相当ご機嫌斜めでしたか？それ以外に、丹下



国会デモ 1960.6.17（『建築の滅亡』から）

さんはこれについて何かおっしゃっていませんでした？『建築の滅亡』という本は、メタボリズムのアジテーションとプロモーションをしたわけですから、よく読むとそれは丹下さんの次の世代を押し出すような役割を果たしています。これは意図的にやられたんですか？

川添 もちろんそうですよ。ある意味で『建築の滅亡』はSFまがいの「大東京最後の日」〔*22〕なわけです。例えば、小松左京〔*23〕が『日本沈没』や『首都消失』を書いたのと似ているんです。私たちの世代は、大日本帝国の崩壊や首都の炎上に立ち合ったという印象が強いんです。そして、その終末観を活動のパネにしてきたような部分がありますからね。かといって、その後の1960年代末、学園紛争を叫んだ若者たちのように、これまでの体制すべてを解体してしまえ、というほどの激しい気持は持っていないんです。

内藤 『建築の滅亡』で印象的だったのは、やっぱり国会のデモ風景のところですね。要するに戦後の民主主義によって教育された者にとっては、日本のシンボルは議会だとすると、国会の囲いをなぜ解かないのか。囲われていたのでは、本当の意味でのシンボル足り得ない…、と書いてありますね。なるほど、そうやって見るのかと思いました。

川添 国会前のデモには丹下さんも参加したんですよ。丹下さんだけじゃなくて、高山英華さん〔*24〕や吉武泰水〔*25〕さんもその場にいた。みんなそんな気持だったんですよ。

内藤 東大建築学科のバリバリのメンバーですね。川添さんは行かなかったんですか？

川添 それがね、その日に国際文化会館で、丹下さんも入って座談会をする予定だったんです。ところが一向に来ないんです。そしたら丹下夫人から電話があって「丹下は今日のデモのこと以外は、何にも考えられない。悪いけど今日は欠席させてください」というわけです。それで僕もすぐにその列に加わった。そしたら、ちょうど東大建築学科の学生たちが赤旗を立てて来たんです。ついさっきまで丹下さん、高山英華さん、吉武泰水さんたちも一緒だったと言っていました。

内藤 そういう動きとは遠い人たちのように思えますが、みなさんどういう気持で行ったんだろう。

川添 やっぱり、その時は真剣に思っていたんですよ。丹下夫人が「今日はこれ以外に何も考えられなくなってる」と言っていたくらいですから。

内藤 『建築の滅亡』には、丹下さんが朝日新聞の「きのうきょう」〔*26〕の欄に寄稿された「ギリシャの時代のことである。どこの都市にも、アゴラという広場があった」で始まる文章が出ていますね。面白い人ですね。僕らからすると、丹下健三というたくまでも建築至上主義で、社会的な動きに関しては距離を置くタイプの人だという印象があるんです

が、やっぱり思ったことはやる人だったんですね。要するに行動と言葉が一致した人。

川添 一致すると思いますよ。

内藤 良いとこありますね、なんて言っちゃ失礼ですが、ひとりの人間として信頼できる人だったんですね。

川添 そうだと思います。

内藤 『建築の滅亡』では“広場”のことについても書かれていますね。僕の研究室で広場に関する論文を書かせたんですが、調べてみると“広場”というのは法律用語になってないんですね。

川添 日本では、そうです。

内藤 駅前広場も正式名称は、交通利便施設ですからね。明治以降、たぶん西欧留学から帰ってきた建築や都市や土木のエンジニアたちは、みんな西欧にあるような市民に開かれた広場をつくろうとしたんです。その名残があちこちに残っています。だけどそのつど、広場の計画はつぶされてきたわけです。明治維新の後も、震災復興計画の後も、やっぱり広場は政治的騒乱が起きる場所だと考えられたんでしょう。

川添 だから行政は正式に認めるかたちでつくりたくない。

内藤 そうです、ですから法律用語にならないんですね。われわれが広場だと思っているのは、実は近隣公園だったり、いわゆる緑地政策で出来る広場とか防災政策で出来る広場はあるけれども、本当の意味で市民に開かれた広場はないわけです。法律用語にすらなっていない。川添さんが『建築の滅亡』の中で書かれた“国会の囲いをなぜ解かないのか”という話も、それに絡んでいるんですね。広場をつくろうと思うと、いわゆる公安政策が出てくる。そういうことですね、きっと。

川添 そうだと思います。

内藤 それがいまだに続いている。その時代に居合わせていないのでよくは分からないのですが、先ほどの国会デモの時が公共空間の在り方の変曲点だったのかもしれない。

川添 たぶんそういう気分が一番盛り上がったのは、あの時だったと思います。

重鎮・前川國男とのこと、そして本当のすごさ

内藤 建築界はどうですか、1960年代？

川添 建築界では嫌われたからね。

内藤 川添さんが嫌われた？誰から？

川添 建築界のボスから。

内藤 そうは思えないですけど、何で嫌われたんですか？

川添 1960年代の終わり頃、『朝日ジャーナル』で「非人間的容器としての建築」という建築特集をや

特集2

〔対談〕時代を画した書籍—9

ったんです [*27]。大体は建築批判ですが、劇作家の飯沢匡は僕のことを「やっと建築界にも話の分かる人が出てきた」と書いていた。

内藤 飯沢さんは川添さんのこと褒めていたわけですね。

川添 そう、褒めてくれた。

内藤 飯沢さんにも、晩年、懇意にさせていただいたんですが、あの方は本当に思ったことしか言わない。

川添 そう。あの人は建築を愛していて、建築が好きだから悪口を言うわけね。だから僕は、「建築を悪く言う人たちの中に、味方になる人がいっぱいいるぞ」というようなことを書いたんです。ところが、前川（國男）さんは、「川添君ひとりが良い子になっているじゃないか」と言うわけ。

内藤 重鎮というのは前川さんのことですか？

川添 そう、菊竹さんに言ったんだって。

内藤 前川論は書かないんですか。

川添 そういうことを含めてこれから書こうと思います。ただね、僕にはよく分からないんですよ。要するに、前川國男が分からないんじゃないくて、前川國男の評価が分からないんです。僕らが聞いているのは、英雄ですよ、ことごとく。

例えば上野の帝室博物館コンペ [*28] に対して、『国際建築』に「負ければ賊軍」[*29] を発表したでしょう。それが非常にヒロイックなことだとされ

ている。要するに「出さないのがけしからん、落選覚悟で出すべきだ」というわけですよ。僕は、出して落ちたことに対して言っているんだと思ったら、「出さなかったヤツはけしからん」と言っている。ボイコットしないで、なぜ出して戦わなかったか、というわけですよ。つまり、評価と実際を調べてみると全然違うんですよ。つまり、前川さんが悪いのではなくて、そういうことにしちゃった建築界が悪いんだろうと思う、半分は。

内藤 往々にしてそういうことありますね。

川添 だけど前川さんは、それを認めて喜んでいただと思うんですよ。「俺は違うぞ」って言わなくちゃいけない。

内藤 それとは別に、前川國男という人間ではなくて、つくったものに対しては、川添さんはどう思っているんでしょうか。

川添 「日本の建築家は昭和15年から25年は、バラックしかできなかった」と堀川勉が書いているんです [*30]。でね、「バラックばかりじゃないぞ。大架講のトラスの爆撃機の格納庫もつくっているぞ」 [*31] と書いたことあるんです。前川さんの建物にはどんなものでも木構造の明快さがあるんですね。だから、この間の前川さんの展覧会 [*32] も、学生さんたちは全部模型を木でつくった。そういう意味では前川さんはすごいなと思いますね。その辺りは丹下さんじゃない、前川さんなんですよ。

香川県庁舎

設計：丹下健三研究室

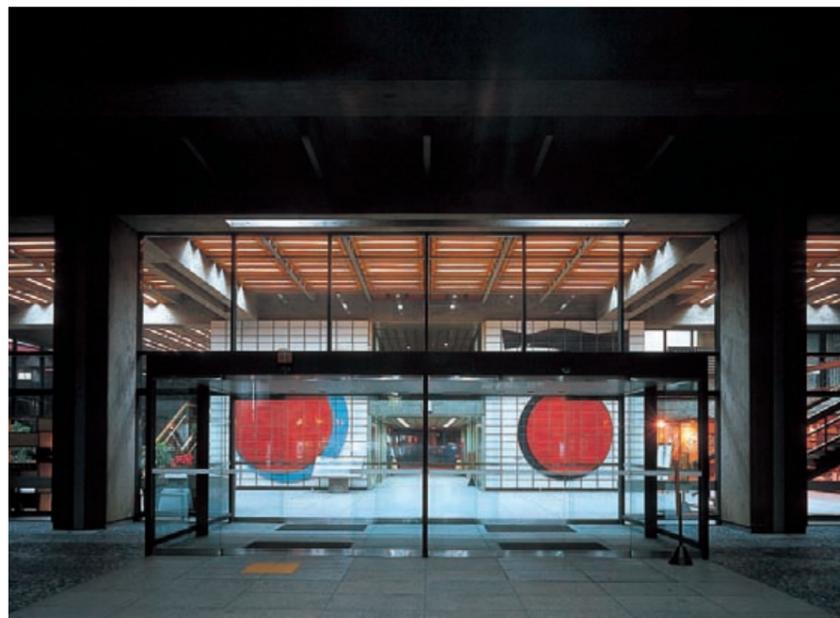
所在地：香川県高松市番町4-1-10

規模：地上8階

構造：RC造

竣工：1958年

(1996年撮影)



上—正面入り口
右—低層棟のピロティから高層棟を見る

- [*27] 『朝日ジャーナル』1967.10.24
- [*28] 東京帝室博物館コンペ (1931) (『INAX REPORT』No.172、p.27参照)
- [*29] 前川國男「負ければ賊軍」『国際建築』1931.6
- [*30] 『「アテネより伊勢」へ—近代日本の建築思想』堀川勉著 (彰国社 1984)
- [*31] 川添登「丹下健三とル・コルビュジエ 1」『近代建築』2008.1
- [*32] 「モダニズムの先駆者 生涯100年 前川國男建築展」(東京ステーションギャラリー、弘前市立博物館ほか)



内藤 そういう見方は初めて聞きました。

川添 そう。一生懸命、設計してその時代を代表している。いまだに木造で模型がつくれる建築を設計したということ。傑作はそういうやつだよ。『熊本美術館』[*33] なんて傑作だと思う。やっぱり木造のヒューマンスケールの空間なんですよ。

内藤 川添さんの前川國男論は聞いてみたいと思います。

川添 そのうち書きますよ。書け書けて、うちの秘書さんも言うんですよ。

分からないことだらけ…？ 白井晟一と丹下健三

内藤 忘れずに白井晟一論もお願いします（笑）。

川添 そんなにアレもコレもできないよ。

内藤 結構、謎が多い人ですからね。白井さんというのは、川添登という評論家にとってはキーワードのひとつですね。“白井晟一をピックアップしたのは俺だ”みたいな感じがあるでしょう…？

川添 事実、そうですね。

内藤 不思議な感じもしますね。丹下さんやメタボリストと白井晟一というのは全然違う肌合いなんですけど…。

川添 だけど、白井さんが若い頃、千葉県清澄山に1軒、家を建てて、そこをアジトにして大投塾[*34] というのをやっていたんです。「大投ってどういう意味ですか？」と聞いたら、「メタボリズムと同じですよ」と言ったんですよ（笑）。

内藤 大きく投げるわけですか？

川添 “自ら投げる”らしい。私の言ったオブジェクト、プロジェクト、サブジェクト、エジェクトのエジェクらしい[*35]。だからメタボリズムだと。そしてメタボリズムについて、好意的な発言をして、評論家の栗田勇がそれに反対したりしている対談[*36]があったと思います。

内藤 白井さんはメタボリズムに対して、好意的だったんですか？

川添 好意的でしたよ。メタボリストの連中は白井さんと親しかった。

内藤 僕らからすると、全然違う感じがしていたんですけどね。

川添 白井さんを芝公園の近くのレストランに招待して、みんなでごちそうしたこともありますよ。

内藤 そうなんですか。僕らのイメージでは、白井晟一というと、昼間は寝ていて、夜は書を書いてて、内向的で、哲学的で、フランス帰りで…、そういう感じですね。メタボリストたちは、どちらかというとやんちゃ坊主みたいな感じでしょう。全然違う印象ですけど、意外と新しい動きに理解があったんですね。

川添 理解があった。

内藤 それは川添さんがブリッジしたからですか？そういう訳ではなくて？川添さんだから認めていたということもあるような気がします。お付き合いは、『新建築』の時からですよ。

川添 白井さんは古いですよ。新建築社に入ってまもなく。だから、その頃の作品は、早くから知っていたわけよ。例えば「善照寺」[*37] なんか、僕は割と好きなんですけど、切妻、妻入りの神社様式で付け柱で真壁の印象を持たせるとか、寺院建築の伝統的な様式を破りながら、高い精神性を持った寺院の印象を見事につくり出しているでしょう。

まあ、それはともかく、今いるこの事務所の前の道を真っすぐ行くとね、僕の自宅にぶつかるんですけど、その途中、右側に白井さんのお姉さんの旦那さん、近藤浩一路[*38]の家があったんです。そして、竹やぶがありましたので、僕らは“雀のお宿”と呼んでいた。その隣が白井さんの家で、白井さんはお姉さんに育てられたんです。お姉さんがお母さん代わりでしたから、だから白井さんにはいろいろとジレンマがあったわけですよ。

内藤 僕も、もっと年をとらないと分からないことのような気がします…。白井晟一もすごくはっきりしたものを残したというより、分からないものを残したような感じが多いです。人としても作品としても。

川添 だからね、本当に一流になるにはね、やっぱり分からないことだらけじゃないと、一流にならないみたいだね。

内藤 丹下先生は？

川添 丹下さんも半分は分からないよね。

内藤 あれほど親しくされていて、それでも半分も謎ですか。透明でデジタルな脳髓を持っているような、頭のいい人ですよ。不透明な白井さんよりはずっと分かりやすいような気もしますが。

川添 あの人は希代の戦略家です。

内藤 戦略家ですか？

川添 そう、戦術は越えてる。

内藤 冷めてるという意味ですか？

川添 冷めてるし、それでやるべきことをちゃんとやっている。“日本の建築界はどうあるべきか”なんていうことは、これは前川國男よりはるかに分かっていましたね。

内藤 そうですね。僕は、1960年の国会デモに実際参加していたという、冷めた思考の枠から飛び出たその情の部分に共鳴しました。そういう丹下健三を思い浮かべたことがなかったから。学生や若い世代の考えに素直に共鳴する、そういうところもある人なんだと、親近感を持ちました。

川添 僕はどちらかというと、丹下さんのそういうところと接していたような気がします。だって僕みたいな小僧っ子が電話をかけても、大した用事でもないのに、すぐ来てくれたんですよ。いまだに分か

[*33] 熊本県立美術館（1977）前川國男建築設計事務所 ▶▶図版p.24

[*34] 大投山房 弟・隆吉やその仲間たちと建てた山小屋の名称。新しき村と榊の道場とマルクス主義運動の拠点づくりを兼ねたような共同生活の場を設けたが、官憲に目をつけられ、ほどなく自然解散した

[*35] 心理学者のボードウィン は、児童の自我認識は、①他人を事物と同じように考える「客観」（オブジェクト）、②自分を意識する前に他人を意識する「投影」（プロジェクト）、③自分を意識する「主観」（サブジェクト）、④他人と自分を同様に考える「投出」（エジェクト）、の発展段階をとると指摘している。川添は、それが人類の自然認識、社会認識の発展段階としても当てはまるのではないかと「移動空間論」（川添登著（鹿島研究所出版会 1968））の中で述べている

[*36] 【対談 建築と詩の原質】草野心平×白井晟一×栗田勇「現代日本建築家全集 9 白井晟一」栗田勇監修（三一書房 1970）

[*37] 善照寺本堂（1958）白井晟一建築研究所 ▶▶図版p.28

[*38] 近藤浩一路（1884～1962）水墨画家・漫画家

[*39] 香川県庁舎（1958）丹下健三研究所

▶▶図版p.32

[*40] 万博における丹下健三とその一世代下の建築家たちの活躍

丹下を議長とする世界デザイン会議の開催を機にメタボリズムの運動が始まったように、次世代に対する丹下の影響力は絶大であった。続く大阪万博では、丹下は基幹施設プロデューサーとして、全体計画と大屋根（お祭り広場）の設計に当たり、菊竹清訓の「エクスボタワー」（1969）、黒川紀章の「タカラ ビューテリオン」（1970）など、一世代下の建築家たちが各種のパビリオンの設計を担当。丹下と次世代との競演の場となった。興行的には6,000万人の来場者を集め大成功を収めたが、技術礼賛の無批判な未来都市志向が露呈したとの評価もある（大川）

かわそえ・のぼる——建築評論家／1926年生まれ。早稲田大学専門部工科（建築）、文学部哲学科を経て、1953年、理工学部建築学科卒業。同年、新建築社入社、「新建築」編集長。

1957年、建築評論家として独立。1959年、メタボリズム結成。1970年、CDI・トータルメディア開発研究所設立。1972年、日本生活学会設立。1982年、日本展示学会設立。1987～99年、郡山女子大学教授。1993～69年、早稲田大学客員教授。1997年、道具学会設立。1999～2002年、田原福祉専門学校校長。主な著書：『デザインとは何か』（角川書店1961）、『建築家・人と作品 上・下』（井上書院 1968）、『川添登評論集 I～IV』（産業能率短期大学出版部 1976）など。

ないとう・ひろし——建築家・東京大学大学院社会基盤学 教授／1950年生まれ。1974年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。1976年、同大学大学院修了。1976～78年、フェルナンド・イグエラス建築設計事務所。1979～81年、菊竹清訓建築設計事務所。1981年、内藤廣建築設計事務所設立。主な作品：海の博物館（1992）、安曇野ひろ美術館（1997）、茨城県天心記念五浦美術館（1997）、牧野富太郎記念館（1999）、十日町情報館（1999）、倫理研究所 富士高原研修所（2001）、ちひろ美術館・東京（2002）、島根県芸術文化センター（2005）など。

取材協力・資料・写真提供

大川三雄（日本大学理工学部 教授、p.21解説も）
香川県総務学事課
菊竹清訓建築設計事務所
熊本県立美術館
黒川紀章建築都市設計事務所
白井晟一研究所
善照寺
丹下都市建築設計
前川建築設計事務所
横総合計画事務所
（50音順）

【次号予告】

次号の「著書の解題」は石元泰博の「桂」。10月20日発行です。

んない。どうしてだろう、僕みたいな若造にね。

内藤 例えば、どういう時に相談されるんですか？

川添 編集のことなんかで迷うことや相談ごとがあると、「先生、ちょっと会いたいんですけど」というわけですよ。

内藤 「会いたいんですけど…」と川添さんが言うわけですか（笑）。普通は逆ですよ。

川添 そうそう、「ちょっと話を聞いてもらえないだろうか」と（笑）。

内藤 編集部があった銀座へ出てくるんですか？

川添 銀座じゃない、新宿です。今みたいに開発されていなかった頃ですが、新宿西口に喫茶店があったんですよ。2週間に一遍くらい。かなり頻繁に行っていた。僕の言うことは何でも聞いてくれたんですよ。

内藤 川添さんが編集長の時、丹下さんはお幾つくらいだったんですか…、幾つ年上ですか？

川添 僕より13歳上です。

内藤 13上っていうことは、40くらい？

川添 私が28歳だから、そうね、40歳ちょっとですかね。「香川県庁舎」[*39]の前後ですよ。香川県庁舎といえば、伝統論争のひとつの成果として建てられて、一時代における全国の庁舎建築の原型となったくらいでしょう。丹下さんは大活躍でしたから、その頃は…。

内藤 当時、東大の助教授ですね。

川添 助教授。

内藤 そういう、立場にこだわらない行動様式は立派ですね。

川添 それで「これ、先生おかしいと思いませんか？」なんて言ったりすると、まじめに聞いてくれたんですよ。

内藤 ケンカすることはなかった？

川添 ケンカはないですけど、機嫌が悪くなることはありました。こっちは勝手なこと言うから。さっきも言いましたが、『建築の滅亡』なんかは、相当、機嫌が悪かったですよ。もう何回も言われた。「あんなこと書くと君、建築評論家も滅亡するよ」って。それはもう、分かりました、と言うしかなかったですよ。

内藤 それはメタボリストで新しい世代をつくら

うとしたので、ご不興を買ったんですよ。でも、それでも、丹下さんはメタボリストたちを懐の中に持ち込みましたからね[*40]。それがまあ、1970年の万博だったりするわけですが、その辺はすごいですよ。なかなかそうはできないと思います。懐が広がったんでしょうね。

川添 丹下さんは懐の大きい人でしたよ。

内藤 いろいろ貴重なお話を伺いました。予定の時間を大幅に超過してしまいました。不足のところがあれば、呼び出していただければ私もいつでも出てきますので（笑）。僕の方が呼び出すかもしれませんか…（笑）。

川添 そうね、あなたを呼び出すような仕事をできると良いと思います。

内藤 先生、悩みごとがあったらいつでも相談に乗りますよ（笑）。

お話を伺って、教科書に載り、もはや歴史的な出来事となりつつある1960年前後の雰囲気を知ることができました。戦時中の話、新建築時代、世界デザイン会議、メタボリズム、そして丹下先生のお人柄など、やはり直接伺ってみなければ分からないこともたくさんあることを実感しました。『民と神の住まい』と『建築の滅亡』は、まさにその節目に上梓されたわけですが、川添さんを突き動かしていた背景を見させていただいたような気がします。ありがとうございました。★

（2008.4.22収録）

川添氏（右）と内藤氏



【対談後記】内藤 廣 「動的思考の不動点」

大塚駅近くの新築マンションの中にある書斎兼事務所。居心地の良い空間だった。壁はところ狭しと本に埋め尽くされている。全集、それも民俗学系のものが多かった。1960

年、『民と神の住まい』で伊勢神宮について論じ、世界デザイン会議でメタボリズムを提唱して中心的な役割を果たし、そのプロバガンダともいえる『建築の滅亡』を世に出した。昨年、痛烈に旧弊な歴史学を指弾した大著『伊勢神宮』を出版した。この間47年、執念である。1960年の伊

勢と2007年の伊勢との間にメタボリズムが挟まれている。建築や都市を動的な視点で把握し、一貫して大衆の側に立つという姿勢はいまだに健在だ。まるで少年のような人だった。★

言葉だけで建築はつくられないのだけれど、やはり言葉がないと建築をつくることができない。1960年に川添登によって著された『建築の滅亡』には、そう思わせる迫力がある。この本の中で語られている「建築」は、歴史の中での建築の位置づけ、社会の中での建築を成立させる枠組みのことである。言葉による思想としての建築といっても過言ではない。考古学的ともいえるスケールの大きさと、狩猟から農耕へ移行する人類の歴史との関係から建築の起源に迫り、現代の他分野を参照しながら人間社会の未来を予測する語り口の中には、ゴシック、ルネッサンス、バロックといった、いわゆる西洋建築史も、書院造りも数寄屋も出てこない。そういう通常の建築史を飛び越して、現代の建築というものをより太い根源との関係に位置づけ直そうという野心が、本書にはあふれている。その意味で、「西洋建築の滅亡」というニュアンスまで含まれている本書には、建築作品の批評はほんのわずかしがなく、それとて、その建築を成立させる社会的な枠組みが文明的に検討され(例えば人間の流動性とホテルの意味、芸術と建築の再統合など)、それに対してどういうパフォーマンスが設計によってもたらされているかが論じられるのである。昨今の凝りに凝った建物のディテールや空間構成を論ずる、建築のレトリックや作家性についての批評とは、そもそも建築批評の構えが違っている。そうした個々の作家の本質に迫ろうとする建築批評には、知的で洗練された美しさとともに、個人主義の殻をどう破っていくのかが見えない閉塞感があるのに対して、本書にはそこを超えていくスケールの大きさがある。だからこそ、川添は丹下健三やメタボリズム・グループと、創作の理論的背景を共有することができたのだろう。

『建築の滅亡』というショッキングなタイトルから、もう建築にやることはなく、消えうせればいいのだというアイロニーを読み取る人もいるかもしれないが、それは間違いである。実際

はその逆で、新しい建築の発生や誕生に希望があることの背景として、前時代の権力を象徴する建築が力を失う出来事や状況が指摘されているのである。つまり、ここでいう「建築」は条件付きで、その滅亡は、誕生と背中合わせであり、建築家がその表側である「誕生」を主体として生きるならば、評論家は裏側の「滅亡」を主体として生きるということなのである。評論家が「建築」の「滅亡」を語ることによって、前時代の枠組みから建築を解放し、人びとがもう一度自由に建築を考えられるようにする。これほど明確な建築評論の立場があるだろうか。もちろん1950年代の「伝統論争」を通して、言葉と実践のせめぎ合いや擦り合わせを経験したことの影響は大きいと思われるが、当時のメタボリズムにおいては建築の枠組みや位置づけについての批評が、建築家の実践に先行するスリリングな瞬間が幾度となくあったのではないと思われる。

川添にとって「建築」は、枠組みや位置づけなしにはあり得ないとすると、古い枠組みから解放されたとはいえ、建築は新たな枠組みを与えられなければなるまい。だから解放といっても、何でもありというわけではなく、その自由には滅亡を経過した歴史性が反映されなければならない。だから、何が建築を破滅に導いたのか?、という問いが新しい建築誕生の鍵になる。本書で建築の破壊を必然的に招くとされるのは、マスメディア、民衆、鉄、そして人口の流動性などである。ヴィクトル・ユゴーの「印刷技術の発明が、伽藍をこなごなに打ちくだいた」という有名な言葉を引いて、印刷技術が中世の人びとの精神的統一のシンボルとしての「建築」を破壊してしまったという読みを、現代のマスメディアという新しいコミュニケーション手段の獲得に敷衍させ、「古代が王様の社会であり、中世が僧侶、近世が貴族、近代がブルジョワジーの社会であるとすれば、これからの社会は民衆の世界」であるとして、民衆による階級のない社会において、権力の象徴である伽藍は破壊の対象であると位置

づけ、鉄による生産手段の発達は生産量を爆発させ、古いものとの世代交代が自然の流れになることを指摘する。そして「来るべき世紀は、人びとが土地から離れることによって、ふたたび大地を強くイメージする時代であろう。目まぐるしい進歩と変貌との新陳代謝の中に、悠久なる宇宙の永遠なる時間を感じずる時代であろう。その時代となれば、これまでの概念による《建築》は一土地にしがみつき、不変のものとしての建築は《滅亡》させられるに違いない」と結論する。

こうして「建築」の「滅亡」を論じることが、新しいコミュニケーション手段と、大量生産手段を持った、階級差のない民衆によって、土地を所有せずにつくり上げられるであろう、来るべき世界のシナリオをあぶり出していくことになる。この多分に共産主義的なシナリオの大胆さを空間的に翻訳するものとして、川添は新石器革命第二期、ジグラッドやピラミッドが建てられた英雄時代を参照する。そして、そこに広がっていたであろう、母なる大地と人間の関係に猛烈に恋い焦がれるのである。この縦横無尽なイメージの広がりには、最終章「未来の都市」の中での、地形をデザインするかのような、メタボリストたちのメガストラクチャーの提案につながっていく。ピロティ、人工土地という実現されたアイデアも、その中にしっかり位置づけられている。

我々は今、この理想高きシナリオと、現実の都市の50年後を見比べることができる。それを見比べる限り、土地所有と民衆の問題は、逆方向に展開しているように思われる。それでも新陳代謝のアイデアは、既存の都市空間の更新へとフェーズを変えれば、見事に再生すると私は見ている。若い建築家たちが取り組んでいる幾つかのプロジェクトの中に既に兆候があらわれているが、それを1960年代のコアに象徴されるコア・メタボリズムに変わって、建物と建物間の隙間(ヴォイド)に象徴されるヴォイド・メタボリズムと呼ぶことにしている。この枠組みで、世界無比の「混乱都市東京」から西洋をうならせる新しい建築を発信することができるか、いま問われているのである。*

建築は、元気なジャンルである。とりわけ、日本の建築界には、いきおいがある。ころみに、書店の店内がここしばらくどううつりかわってきたかを、おいかけてみよう。建築関連の書棚は、まちがいなく書店内にしめる比重をましてきた。雑誌のコーナへたちよっても、建築をあつかうそれはふえている。

有名な建築家も、すくなくない。安藤忠雄の名は、うちの近所でも、たいがいの人が知っている。藤森照信や黒川紀章の知名度も、あなどれない。建築家たちは、文化方面の、ちょっとしたスターになっている。

20世紀のなかごろまでだと、こういう状態はありえない。明治の建築界に君臨した辰野金吾の名前など、誰も知らなかったろう。フランス文学関係者が、辰野隆の父として記憶にとどめたぐらいではなかったか。曾禰中條事務所の中條精一郎も、作家・中條百合子の父でしかなかったろう。宮廷建築家の第一人者であった片山東熊も、ほぼ無名であった。

だが、20世紀の後半になると、様子はかわってくる。まず、丹下健三が、モダンな、あるいは風変わりな建物をつくる人材として、認識されだした。1970年の大阪万博以後、この傾向には、いっそう拍車がかけられる。

目立つ、変なかつこうの建築をおもしろがる気分も、以前よりはよほどひろまった。そこに、ある種の美しさや味わいをみとめる精神土壌も、つちかわれだしている。

規模の大きい建築計画も、目に見えてふえだした。国際的に活躍する建築家も、おおぜいいる。

おわかりだろうか。建築は、20世紀後半以後、基本的にのぼり調子をむかえている。さまざまな指標が、上むきかげんを、しめているのである。

文学では、物語の衰弱がうんぬんされるようになって、ひさしい。いわゆる文壇も、事実上くずれさっているようだ。文芸誌も、売れなくなっていると、よく言われる。力強い文学の登場は、第三世界に期待するしかないという声も、しばしば耳にする。

こちらは、20世紀以後、衰頹が基本的なモードになったということか。すくなくとも、建築のいきおいとくらべれば、ジャンルは低迷傾向にあるとみなしうる。

音楽も、現代音楽が調性をうしない袋小路にはいったとされている。じっさい、パッサヤモ

【特集2】コラム

『建築の滅亡』に関する雑感

井上章一

SHOICHI INOUE

ーツアルトとならびうる名前を、現代音楽は生みだしていない。私はメシアンや西村朗も好きで、よく聴くが、そんなのはごく少数派であろう。

調性をうしなった現代音楽は、一般大衆から遊離した孤高のジャンルになっている。描写をすてた現代美術も、ほぼ同じ途をたどっていったと言ってよい。そして、似たような事情で旧様式から遊離した現代建築は、以前より大衆社会へ近づいた。

現代文学、現代音楽、現代美術になら、滅亡という言葉も、あるていどはあてはまる。おおげさにすぎるとは思うが、まったく的はずれとも思えない。

だが、現代建築は、ちがう。文学や音楽、そして美術などと、いきづまりの状態をわかちあってはこなかった。他のジャンルが袋小路へおちいったのをよそ目にしつつ、飛躍をとげてきたのである。

あからさまに言ってしまう。それは、表現にかかわる諸ジャンルへの、新しい参入者なのである。建築は、一種の成金になったのだ。

まあ、文学、音楽、美術にも、成金時代はあった。ヨーロッパ史上だと、19世紀から、それらは肥大化をとげている。いわゆるロマン主義の時代が、諸芸術の神格化をうながした。有名な、いや偉大な作家という芸術家像も、19世紀ロマン主義のたまものである。

その同じ途を、建築は20世紀になって、たどりだした。世界に名のとどろく偉大な建築家像を、ようやく100年ほど前から生みだしている。日本は、5、60年ほど前から、輩出しはじめた。私の目には、事態がそううつる。くりかえすが、建築は新参者であり、新興勢力なのである。滅亡のきざしは、どこにもない。

まあ、自意識の強い建築家には、成金めいてうつることをいやがるむきもあろう。それで、他ジャンルの袋小路めいたたずまいを、かりてもくるようになる。逆説や皮肉、屈折や亀裂といったよそおいを、まといたがるわけだ。ほんとうは前向きで、意気軒昂なくせに、病人のふりをするのである。

レム・クールハースには、しんじつ病の徴候があると言われようか。しかし、現代中国にそびえたつその建築をながめていると、やはり元気なんだなど感じる。ピョーキのふりをしているとしか、思えない。

川添登が書いた『建築の滅亡』については、ほかの誰かが適格なコメントをほどこそう。私は、この評題から想い浮かべた建築観を、のべさせてもらったしだいである。*

いのうえ・しょういち——評論家／1955年生まれ。京都大学卒業。もともとは、建築の勉強をしていたが、今は歴史にとりくんでいる。主な著書：『つくられた桂離宮神話』（弘文堂 1986）、『法隆寺への精神史』（弘文堂 1994）など。今は伊勢神宮についての著書を準備中。

【特集2】コラム

建築の枠組みとしての建築批評

塚本由晴

YOSHIIHARU TSUKAMOTO

つかもと・よしはる——東京工業大学大学院 准教授／1965年生まれ。1987年、東京工業大学工学部建築学科卒業。1987～88年、パリ建築大学ベルビル校。1992年、貝島桃代とアトリエ・ワン設立。1994年、東京工業大学大学院博士課程修了、博士（工学）。2000年より現職。主な作品：ミニ・ハウス（1998）、ガエ・ハウス（2003）、ハウス&アトリエ・ワン（2005）、ノラ・ハウス（2006）、鶴山荘（2007）など。主な著書：『ベット・アーキテクチャー・ガイドブック』（共著、ワールドフォトプレス 2001）、『メイド・イン・トーキョー』（共著、鹿島出版会 2001）、『図解 アトリエ・ワン』（共著、TOTO出版 2007）など。